

アンソロジー
anthology

ね む
合 歡

Vol. 3



2009 夏

目次

句ひくるもの	荒木絹江	2
蘆原	石井宏幸	4
平々凡々	井上悦男	6
新緑	岩崎ゆきひろ	8
花と影	植田桂之	10
石見の旅	奥山登志行	12
きのふより	小六誠一郎	14
会陽	桜本滋子	16
移ろひ	角南房子	18
若葉の下	田辺文枝	20
緑したたる	富阪宏己	22
願ひ事	名木田純子	24
水のごゑ	信里由美子	26
海峡の街	伴 明子	28
花は葉に	三木瑞恵	30
夏野	米元ひとみ	32
山ばかり	渡辺牛二	34
詩と俳句について	岩崎ゆきひろ	36
娛しみの馬車に乗って	富阪宏己	37

匂ひくるもの

荒木絹江

咲きぞめの桜光に紛れ込み
花吹雪浴びむと一つ橋渡る
牡丹の満開といふ重さあり
先達の錫杖の音や風光る

遍路の眼沖の波乗りばかり追ひ
蕾まだ固まつてゐる藤の房
実をつけし枇杷の青さの匂ひけり
カリヨンの鳴るたび新樹濃くなりぬ
さりさりと葉桜一枚づつの風
筍のあをあを匂ふ夜の底

蘆原

石井宏幸

建網を巡る舟影湖薄暑

短夜や沖に向きある石祠

萍の隙の閉ぢゆく速さかな

夏帽子沖には波の綺羅ばかり

菱 咲くや大魚の濁す泥の底
布 袋 草 暗 雲 湖 を 覆 ひ つ つ
葛 は 這 ひ 鷺 は 高 き を 過 る の み
葛 の 雨 山 の や う な る 青 び か り
日 の 蘆 と 言 へ ど も 光 定 ま ら ず
蘆 原 に 動 か ぬ 影 の な か り け り

平々凡々

井上悦男

四十年妻の顔見て年明くる
そのくさめ向う三軒両隣
薔薇二本妻へのバレンタインデー
洗ふ菜の水の中から出づる虫

ひと畝を耕し残す日暮れかな
鳴き声の追ひかけてゐる雲雀かな
掬ひ来てやがて一年なる金魚
朝顔や一輪だけの風をうけ
空籥のあとに鐘鳴る歳の市
煤払ふ御先祖様を逆さまに

新 緑

岩崎ゆきひろ

単線のまたも停車や里若葉
新緑や路面電車の軋む音
旅人や少し離れて三尺寝
新緑に持ち上げられてゐる城址

登り来し松山城址若楓
新緑や松山城址隠門
耳元をかすめ駅舎の親燕
ひたすらに水面すべりて親燕
改修の縁の下なる蟻地獄
蟻地獄顔の集ひてをりにけり

花と影

植田桂之

木蓮の花芽は青き空にあり
蠟梅のふくよかにほころびにけり
春立つや糸引くやうに雨の降る
山茶花の花つきすぎて咲きすぎて

春雨の静かな音を聞いてをり
夏燕影なき街を飛びにけり
山里に人影のなく蕎麦の花
灯の色の障子に写る人の影
風をみな追ひ風にして花芒
降りしきる雪の襖や立石寺

石見の旅

奥山登志行

夏燕風に突つ込む日本海
旅二日吞まれて涼し日本海
神さぶる石見の万緑影も濃し
下闇を抜け海光の城址かな

赤 錆 の 涼 し き 遠 洋 漁 船 泊 つ
朝 糶 の 裂 帛 の 声 海 涼 し
漂 へ る 海 月 の 行 方 誰 も 知 ら ず
浮 雲 の 影 よ り 淡 く 海 月 浮 く
ふ に や ふ に や の 海 月 ど つ こ い 生 き て ゐ る
漂 泊 の 旅 情 深 ま る 海 月 かな

きのふより

小六誠一郎

きのふよりけふのこほりのあつきかな

白々と冬の黄菊の朝となる

極月のシリウスの色褪せぬ朝

冬霧の深き朝を峠越ゆ

手袋の指先もまだ日の出前
星もなく月もなき朝師走来る
諸鳥の静かなる朝冬深し
深々と立春を吸ふ靄となる
春雨の未だ暗きに降り初むる
初音聞く良き朝となるきのふより

会 陽

桜本滋子

今年また会陽冷なり夜半の雨
激励の会陽太鼓の女衆
掛声の乱れていよよ裸押
本堂の階までなだれ裸押

一瞬の宝木の行方裸押
会陽の灯裸の渦を照らし出し
本堂に押し合ふ熱気裸押
万の手の闇をつかめる会陽かな
遺愛なる会陽の酒を味はへり
偲ぶことことさら深き会陽かな

移ろひ

角南房子

木々の影深まりゆける晩夏かな
庭静か蝉のなきがら掃き寄せて
知らぬ間に秋高くなり広くなり
新涼の風透きとほる今朝の庭

秋桜心も風に揺れてをり
街路樹の影を立ち上げ月登る
月近くなり遠くなり観覧車
祖母のこと母と語りし十三夜
鉦叩一打残して眠りけり
汀より暮るる波音秋深し

若葉の下

田辺文枝

あたたかな夜や雨音に耳澄まし
紫を紡ぎ出しをり野のすみれ
あの辺り友の家あり花曇
信号を櫂若葉の下に待つ

テ—ブルと椅子をテラスに夏来る
参道を横切つてゆく代田風
雨滴ひとゆすりして実梅とる
南天の花ひらく前華やげる
夕立の止みふたたびの夕立来る
玄関の網戸の奥ののれん揺れ

緑したたる

富阪宏己

榎 櫃 の 実 挽 ぐ 青 春 を 挽 ぐ ごとく
蒼 な ほ 結 び て 返 り 咲 く 躑 躅
高 々 と 一 天 に 柿 冷 ゆ る な り
ク リ ス マ ス ケ ー キ 分 け 合 ふ こ と も な く

冬の夜の更けゆく水の静寂かな
握る手の冷たし両手にて包む
雪哀し哀しみ積んでゆくごとく
早春の翳ればジャズの哀しけり
暖かき光の中を歩みけり
ベガを追ふ緑したたる夜となりぬ

願ひ事

名木田純子

残像の流星になほ願ひ事

春隣右頬に風左に日

ともかくも雑煮の味を娘に伝へ

こまごまと色を配して雛の膳

山の日の照りかげり乗せ雛流る
婚の儀の進む教会 蔦若葉
風光るべーるなびかせ鐘を打つ
花に会ひ花に嫁ぎし一曆
肩の荷をおろせし母の春愁に
千本の記念樹の丘草霞む

水のこゑ

信里由美子

水澄みて水の静寂へ空を呼ぶ
新涼や水の中より水のこゑ
秋深むとは朱き実の赤きこと
谷戸明けて谿のぼり来る霧の音

ひとつづつ石に貌生れしぐれけり
風花てふ風の眩き頬に受け
冬雲の追ひつめてゆく空の青
空よりも地にかむさりて冬の雲
大空に根を張るやうに大枯木
寒林の揺れて大空ずらしけり

海峡の街

伴 明子

落葉して大地の絵画出来上がる
落葉踏む音の途絶えて我となる
快晴の寒林といふ影の中
寒林に影を重ねて歩きけり

寒林に心のうちを晒しけり
寒林や素直な心取り戻す
冬ぬくし魚の泳ぐ下歩く
満天の星が流れて時雨けり
星のみな門司の灯となり時雨けり
海峡の街は眠らず冬灯

花は葉に

三木瑞恵

鶴亀の池のさざ波花揺らす
朝桜飛機を仰ぎて旅ごころ
もてなしの薄茶一服花の園
さざ波の煌めく方へ散る桜

ままごとのやうに一枚花筵
少しづつお尻のずるる花筵
花吹雪光散りばめをりにけり
花見舟名残りの花に棹を挿す
枝川はゆるき流れや残花散る
記念樹を映す池の面花は葉に

夏野

米元ひとみ

ライダーへ夏野の起伏ありにけり
電柱のどれも傾く麦の秋
美瑛なら草にゆれ鳴く夏の鳥
ルピナスの風に小鳥の水飲み場

ぶるるんと駿馬は夏の朝ゆする
いつまでも我にゐる馬涼しかり
海ぢゆうの風をあつめて青岬
どれが岩どれがアザラシ襟裳夏
みづうみの雲にふれては揚花火
避暑終る積丹ブルータそがれて

山ばかり

渡辺牛二

ふるさとの水音高し初蛙
道なりに行けば墓あり里の春
芽吹く木に鴉見てゐる七回忌
線香に咽る連鎖や春座敷

過疎の村つなぐ電線鳥交る
春の川魚影たしかめつつ歩く
休田を分けて一条春の水
道一つ外れ春子の楳並ぶ
鶯や目鼻わからぬ石地藏
ふるさとは間近に笑ふ山ばかり

詩と俳句について

岩崎ゆきひろ

「俳句は詩でなければならぬ。」と俳句の入門書にも書かれているし、そういう意味のことを言われる方が多い。

では、「詩とは何か」と問えば、答えられる人はほとんどいないのではないか。

これは詩人に問うても詩の入門書を読んでも明確な答えが出てこない。

一概に詩といっても、叙情詩、叙事詩、散文詩等々と種々雑多であり、僕の頭で何度読んでも理解できない詩もずいぶんあるのである。

ここに言われる「詩でなければならぬ。」とは恐らく「鐘の音のように読んで余韻のある」ものを指すのであろう。

そういう意味での詩と俳句との共通点、それは「共

感」であろう。

読んだ人の胸に響くものでなければならぬ。

俳句の場合、読者の個性により感受性に多少の誤差があるが、一言で言えば「説明は駄目だ」ということ。

詩の中にも駄文の行を変えることのみによって、「詩」と称する（僕の詩もそうかも知れない）ものが多数存在するが、俳句も五七五の形態を取りながら、「何が何して何とやら」と説明に終るものが非常に多いのである。

説明にならないための工夫は「意外性をつくことである」そのためには「季語を離す」「上下を転倒してみる」などの工夫が必要だと思う。

作りっぱなしにしないで、「説明になっっているかどうか」よく吟味し、推敲することが必要なのではないだろうか。

娯しみの馬車に乗って

富 阪 宏 己

長き夜の苦しみを解き給ひしや

稲畑汀子

合歓の会では月一回、句会を開く。奈良方面への一泊吟行会、島の宿での句会、花見や紅葉狩り、岡山市街での吟行と、その内容は多彩だ。

長年、会員は自分の好きな句を十句探し、この句会へ持ち寄ってきた。振り返ってみると、今日までに私が持参してきた好きな句は累計千句の大会に乗ろうとしている。その中で、最も好きな句が掲句である。

私たちには眠れぬまま、みずからの心臓の鼓動を聴き続けた夜があるであろう。

大きな力によって生かされている自分を認識する作者が、人間の弱さを恥じらっているかのような一句。ひしひしと伝わってくるのは、真摯に生きる生命の鼓動だ。

話 話は飛ぶが、こちらはアメリカ合衆国のオバマ大統領がミシェル・オバマと出会ったときの述懐である。

「彼女の瞳のなかにはかすかな影があった。とても小さな不安である。彼女は心の奥深くで世界がどれほど壊れやすいものであるかを知っているようであった」生命が生命をみつめるまなざしの、なんと深く繊細なことか

黄昏が静かさを連れてくる頃、荒れた山地に咲く野いばらや月見草を見ると、可憐な花たちはいつせいに見詰めかえしてくる。それはまるで人であるかのように。

写生するとは生命と出会うことかもしれない。この世のありとあらゆる生命と。滑稽で愚かで哀しい生命と。

傷つきやすい合歓の会の仲間たちよ。〃苦しみを解き給ひしや。苦しみを解き給ひしや〃世俗のこだわりを捨てて「娯しみの馬車に乗ろう」花園を巡ろう。句帖を素敵な出会いで一杯にしよう。

◆新聞や雑誌あるいはネットでも、俳句欄に知っている方の句を見つけると自分のことのようにうれしくなります。

◆ましてそれがテレビとなると、俳句と一緒にその方の表情までが見えるのですから、たまりません。

◆五月十六日、たまたま点けたテレビが、いきなり「岩崎ゆきひろさんです」としゃべり、顔を映し出した時には、目が点になってしまいました。

◆NHKの俳句王国、ちようどメンバー紹介の場面でした。

緊張されたゆきひろさんは、まるで少年のように見えました。

◆緊張がほぐれたのは兼題句の名乗りが終わる頃でしょうか、アナウンサーの「方丈記、よく読まれるのですか」の質問に「よく読みます」一呼吸おいて、「短いですから」と答えられたのがゆきひろさんらしくて印象的でした。

◆兼題句、自由題句とも鷹羽狩行主宰の選に入り、見ていた私もほっとしました。私にとっても緊張の一時間でした。

新茶汲む開きしまゝの方丈記

町騒の隙間を縫って親燕

岩崎ゆきひろ

◆原稿、編集会議と、ご協力ありがとうございました。次号もよろしくお願ひします。
(牛二)

アンソロジー合歓 Vol.3

平成 21年 8月 1日発行
発行 合歓の会
印刷 弘文社（津山市）
発行責任者 富阪宏己
連絡先

〒701-0304

岡山県都窪郡早島町早島 3991-144
富阪宏己方

<http://nemu819.net> Email: info@nemu819.net